「闇よ、さらば」　　2024年2月25日
ヨハネによる福音書12章27～36節　　主日礼拝

　先週は清水栄光キリスト教会の皆さんと合同礼拝を行いました。石渡牧師が今年度末で辞任されるということにより、他の教会ではどんな礼拝をしているか見学に行きたいということでまずはわたしたちの教会へ来られました。というか、この問いは合っているようで、案外的を外しているということも思ってしまいました。というのは、その教会の礼拝はその日その朝集まったメンバーで、というのはもちろん神さまにここへと導かれた人たちによって、言うまでもなくオンラインで参加されている方がたも含めて、その礼拝の空気を作り、神に捧げる礼拝となっているからです。司会や奏楽者、献金当番、受付や生花の準備、オンライン配信の準備、それだけでなく平日にはお掃除をしたり、何よりそれらの奉仕者のためにと祈りが献げられています。奉仕者という言い方もありますが、最大の奉仕は礼拝する一人ひとりです。
　どこか他の教会のことは、この際どっちでもいい訳です。わたしたちが捧げる礼拝はこれだということなのです。ここに招かれる一人ひとりは全く違う一週間を過ごしてきて、体調も先週とは違うところがあるかもしれません。着ている服も違えば、バイタルも違う。そんな一人ひとりが集められて、一緒に礼拝をする、このことだけでも奇跡だと思いませんか？　そんなわたしたちが同じ神の言葉を聞いて、讃美歌を一緒に歌って、新しい一週間へと送り出されて行きます。
　とうとうと言うべきか、いよいよと言うべきか、70周年記念誌のまずは初稿を印刷屋さんに入稿しました。半年遅れではありますが、何とか今年度中に発行したいと一月末のお休みの後は毎日このためにガリガリやりました。この後、十日程度で見本が来ると思いますので、それをみてもう一度直してから、本入稿という形になります。やっとここまでたどり着けました。このためにパソコンも新調してくださり、サクサクです。この記念誌のために、さまざまな方がたに原稿を頂戴しました。教会の皆さんからも証しの言葉を綴ってもらいました。それらを読みながら、本当に短い文でよくまとめてくださったと感心しています。きっと文字には書けない思いや願いや祈りがあると率直に感じました。行間にあふれているものがきっと記念誌の大きさ重さ以上にあると思います。
　参考にしたのはこの教会の40年の歩みです。今回、わたしは「教会墓地について」という文章をまとめました。その内容は後ほど読んでもらえば分かりますが、４０周年誌の年表の中にこうありました。1982年のことです。10月10日、教会墓地・墓碑完成感謝式　礼拝後（愛宕霊園）。たったこの一行ですが、この年の10月10日は主日だったということがまず分かります。そしてその礼拝をみんなで捧げた後に、これまたみんなで墓地に行って、墓碑が完成したことを感謝して礼拝をした

のだということがわかります。82年の秋は、みんなで墓地のことを分かち合いましょうと祈ってやっと形になったことを喜んで主に感謝する礼拝をその墓地の前で行ったことが、目に浮かびます。たった一行の中に情報はそれほど多くありませんが、教会が喜んでいる姿が、感謝の祈りを主に献げている姿が、わたしには見えて来ました。

そんな記念誌を作りたいと思いました。もう遅いかもしれませんが、今度は読み手側の問題になるのかもしれません。それを後の人がどう読むのか。そこまで考えては作れませんが、これを伝えたいというものがにじみ出てくるようなものになればいいなあと思います。それを後の人がどう読むのか、聖書も実にそのように書かれたものだろうと思います。

今朝与えられた聖書テキストはヨハネによる福音書12章です。今日の場面はエルサレムですが、この12章はベタニヤから始まります。過越祭の六日前の出来事です。ベタニヤとはヘブライ語で「貧しい者たちの家」という意味です。重い皮膚病を患っていたラザロもこの村にいました。あるいは寡婦たち、しょうがいを負っていた人たち、高齢者など、誰かの助けなしには生きることができない人たちが寄り添い合って生きようとしていたのがこのベタニヤ村だろうと思います。

そのベタニヤ村に主イエスはエルサレム入城直前という時に訪れたのです。どこかイエスさまの心の置き所はここに合ったのではないかとわたしは思っています。ここから送り出されたいという思いがあったからこそ、最後の時をこのようにベタニヤで過ごされたのでしょう。食事の場面で、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足にぬり、自分の髪でその足を拭った。家は香油の香りでいっぱいになった、とあります。きっとこれ以降、あらゆる場面でこの香油の香りが主イエスの足から漂うことになります。

そして子ロバに乗って、エルサレムに迎えられます。なつめやしの枝、これが実はシュロと言って、イースター一週間前の棕櫚の主日の出来事です。イエスさまを迎えた時、エルサレムの人たちはホサナと叫び続けたとあります。このホサナとは今救ってくださいという意味のアラム語で、緊張感を持った言葉です。生活に疲れ果て、主よなぜですかと問わなければならないことが次々と起こり、指導者たちは一向に取り上げてくれない。この世の現実を何とかして欲しい。そのような状況の中で人びとがこのように叫ぶのも分かります、主よ、今救ってください、と。

この人が来るべき預言者なのか、メシアかどうか、弟子たちも最初は分からなかったと書いてあります。ただ、大勢の群衆はラザロを復活させたと聞いて、ああそのようなしるしをここでもして欲しいと願ってイエスを迎えようとしたのです。

そうこうしている間の出来事です。祭のためにエルサレムはあちこちから来た人びとでごった返しています。波のように押し寄せる人たちの中で、それも静かな中ではなく喧騒とした都でイエスはこのように言われます。「今、わたしは心騒ぐ。

何と言おうか」。直訳するとこうなります、「今、わたしの魂はかき乱されている。何を言おうか」。新共同訳聖書が訳出している心という語は魂ととらえるべきもので、直前25節で「命」と訳されているものと実は同じ言葉です。命がかき乱される、ベタニヤでは葬りの日のために取っておいた香油を注がれ、そのベタニヤからエルサレムに迎えられ、人びとはホサナと叫び続ける。今救ってくださいという叫びは、どこかイエス自身の命をもかき乱すような声として響いていたのです。イエスは続けます、「父よ、わたしをこの時から救ってください」。我が魂は恐れおののく、我が魂を助け出したまえ、詩編の引用とも言われていますが、この言葉のモチーフはあのゲッセマネでの祈り、例えばマルコ14章35節以降、できることならわたしから遠ざけて欲しいとイエスは祈っています。でもまだ言葉を続けます、「しかし、わたしはまさのこの時のために来たのだ」と。

なつめやしの枝を持って民衆が叫んだ「ホサナ」とは明らかに違うものでした。わたしをこの時から救ってくださいと言おうか、いやわたしはこの時のために来たのだ。おそらくこの時もマリヤがその足に塗った香油の香りが漂っていたでしょう。その香りにイエス自身も奮い立たせられながら、向かうべきところへ向かおうと言われるのです。26〜29節

神が語る時、雷鳴のように聞こえるのは旧約聖書の時代から変わりません。あのシナイ山でモーセに十戒が告げられた時、山に雷鳴が轟き、稲妻が光り、角笛の音が鳴り響き、山が煙に包まれたとあります。神が語られる時、雷が鳴るのと同じ様子です。そして、30〜33節。

今こそ、世が裁かれる時。この裁きというのは、恐ろしいものではありません。すべてのものが神さまのものさしで測られるということです。その神さまのものさしが明らかにされる時、わたしたちはそのものさしで測られるということです。私たちはいつしか、自分の物差しを使って人を測ってみたり、あるいは神さまをも測ったりしていないでしょうか。神さまのものさし、それが正義が行われるという意味だと思います。神さまのものさしで測られる時、短いものは長くされ、長いものは短くされる。正義も自らの義を振りかざすのではなく、神の義が表されるということです。そうするとこの世の支配者はいられなくなる。なぜなら不正によって正義を行っていないからです。ご自分がどのような死を遂げられるかを示そうとこのように言われた。地上から引き上げられる時、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。ここにも出てきました、すべての人を。ヨハネは、イエスの口にすべての人をという言い方を乗せて、救いの完成を示しています。

群衆は言葉を返します。34〜36節。メシアはいつもいつまでもわたしたちと一緒におられるはずではないのか、どうして上げられるなどと言われるのか。あなたこそメシアであると望みをかけているのに。群衆のこの言葉はもっともです。そしてイエスはいつも通り、それには答えないで光について語ります。このあたりがイ

ザヤ書からつながる、というか旧約聖書の民が待望していたメシア、油注がれた者の到来を、そして隠されていたものが明らかにされるという意味において見えるようになることを伝えています。

ここに新共同訳の限界でしょうか、あるいは意図的に訳出されていないのか、ある言葉が抜けています。光のあるうちに、という言葉が二回出てきます。このいずれにもこのような修飾語がくっついています。それは「自分たちに」というものです。なのでここを直訳するとこうなります。「まだしばらくの間、光があなたがたの間にいる。闇があなたがたを捕らえることのないよう、自分たちに光のあるうちに歩みなさい。闇の中を歩む人は自分がどこへ行こうとしているのかわからないでいる。光の子らとなるため、自分たちに光のあるうちに、光を信じなさい」。

光はどこにあるのかといえば、それは自分たちのうちにあるのだ。どこかの誰かが持っているものではない。いや、このわたしのうちにある光に気がつく時、すべては変わって見えるのかもしれない。同じように闇というものも、どこかにあるものではなく、この自らの心の中にあるものではないでしょうか。闇なんていらないと思ったところで、自分の中にあるものだ。だからその闇の中に光があることを、そしてその光は闇を照らすものであることを知ることが大切なのではないでしょうか。それはその光を信じることです。

言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。（ヨハネ1:4-5）

【お祈り】主なる神さま、あなたの御名をあがめて心から感謝いたします。この礼拝を、そして与えられた御言葉をありがとうございます。

わたしたちはこの世にあって、あなたの正義を待ち望んでいます。貧しい者たちの家が、あなたによって豊かなものにされることを聖書から聞いています。わたしたちに与えられているこの教会の交わりをも豊かに祝してください。すべての人があなたと共にあることを喜ぶことができますように。そしてあなたを信じることによって、わたしたちの内なる闇に、希望の光を灯します。それによってお互いを明るく照らし、光の子として歩むことができますように。

新しい一週間が始まりました。この週も教会につながる一人ひとりの信仰と健康とを支えてください。それぞれの勤めや学び、日々の営みを祝福してください。三学期を過ごす子どもたちの健康を守ってください。感染症からわたしたちの身体や心を守ってください。そして今日それぞれの場所で礼拝する一人ひとりを祝福してください。あなたのみ名によって結ばれていることを感謝いたします。

遠くミャンマーの地で、国軍による暴力が行われています。今、政治に責任ある人たちに正義と良心とを与えてください。NUGに政権を返上する勇気と力を与えてください。そして何より人びとの命と暮らしが守られますように。

わたしたちの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン